アップフィールドギャラリー企画展

Director 湊 雅博

DIVISION-1

2011年
5月13日(金) – 5月31日(火)

畔柳寿宏 Toshihiro Kuroyanagi

1970年 兵庫県西宮市生まれ
1992年 大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業
2008年〜09年 尾仲浩二ワークショップ「街道塾」参加
2009年〜「GALLERY WAWON」メンバー
a days http://d.hatena.ne.jp/qjn/
個展
2009年〜「a days」シリーズ GALLERY WAWON
グループ展
2010年「花」GALLERY WAWON
2009年「2008年街道塾修了展」ギャラリー街道

相馬 泰 Yasushi Soma

1962年 東京生まれ。
日本大学芸術学部写真学科中退。
00年代にネット上での写真の在り方に興味を持ち、
東京及びその周辺で撮った写真をブログで発表し続ける。
東京的日乗 http://nitijyou.exblog.jp/
Slice of Life http://d.hatena.ne.jp/danntyoutei/
グループ展
2010年「ながめるまなざす」UP FIELD GALLERY
2009年「LAND SITE MOMENT ELEMENT」UP FIELD GALLERY

中村綾緒 Ayao Nakamura

1976年 埼玉県生まれ
東京造形大学造形学部デザイン学科II類織専攻卒業
個展
2011年 作品集『Water 2010』発売
2010年 ポスター版作品集『Water 2010』発売
2009年 作品集『night I,II,III』を3冊同時発売
2006-2009年まで神保町に自身のアトリエ兼ギャラリー
[1号室 | 2号室]を立ち上げ、運営と作品発表を行う
2002年よりwebで作品を随時発表 www.nakamuraayao.com
2001-2004年 自主運営ギャラリー photographers' galleryに参加、
作品発表を行う
現在は場所を特定せず様々な形で制作と発表を続けている。
写真、映像、ウェブサイト、ZINEなどグループ展多数。

山方 伸 Shin Yamagata

1973年 奈良県生まれ
1996年 高知大学理学部生物学科卒業
個展
2007年「over the river」コニカミノルタプラザ
2005年「bee fly」コニカミノルタプラザ
グループ展
2010年「ながめる まなざす」UP FIELD GALLERY
2009年「LAND SITE MOMENT ELEMENT」UP FIELD GALLERY
他、
賞
2006年 2005年度コニカミノルタ・フォトプレミオ年度賞大賞

DIVISION-2

2011年
6月3日(金) – 6月21日(火)

坂本政十賜 Masatoshi Sakamoto

1965年 東京生まれ
個展
2009年「青森の家」ジュンク堂新宿店カフェ
2007年「空間=風景」プロジェット
2007年「FLOATING」西瓜糖
グループ展
2009年「LAND SITE MOMENT ELEMENT」UP FIELD GALLERY
2008年「Invisible moments」UP FIELD GALLERY
2002年「風景の余白に:写真」日仏学院
著書
2006年 写真集「FLOATING」espace vide
2006年 写真集「TRAVELING」espace vide

田中マサシ Masashi Tanaka

1963年 東京都国立市生まれ
個展
2010年「DARKSTAR XI」柳沢画廊
2008年「DARKSTAR X」ギャラリー惺
2006年「DARKSTAR IX」柳沢画廊
他、多数
グループ展
2010年「CORRESPONDENCE/LANDSCAPE 2010」ギャラリー 工房 親
他、多数

濱浦しゅう Shu Hamaura

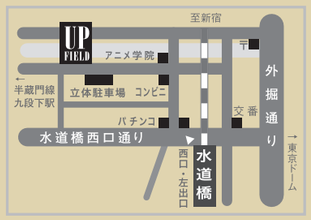
1968年 島根県生まれ
個展
2010年「水無月」Place M 小ギャラリー
2010年「櫻の園」Place M 小ギャラリー
2009年「霞ーkasumi」コニカミノルタプラザ
2008年「Shadow Tail」Place M 小ギャラリー
2007年「幻の街」Place M

横澤進一 Shin-ichi Yokozawa

1968年 埼玉県出身／東京都在住
阿佐ヶ谷美術専門学校卒
個展
2011年「煙野」銀座ニコンサロン
グループ展
2010年「ながめる まなざす」UP FIELD GALLERY
ZINE
2010年「Dizziness sand」New York Art Book Fair

協力 合同会社 芸力 http://geiriki.com/

UP FIELD
UP FIELD GALLERY
〒101−0061
東京都千代田区三崎町3−10−5
第三原島ビル304
tel.fax.03-3265-0320
e-mail:office@upfield-gallery.jp
http://www.upfield-gallery.jp
・JR水道橋駅・西口・左出口・徒歩3分
・地下鉄・半蔵門線・九段駅・出口5・徒歩10分



Toshihiro Kuroyanagi

Yasushi Soma

Ayao Nakamura

Shin Yamagata

Masatoshi Sakamoto

Masashi Tanaka

Shu Hamaura

Shin-ichi Yokozawa

DIVISION-1
2011年
5月13日(金) – 5月31日(火)
畔柳寿宏　相馬 泰
中村綾緒　山方 伸

DIVISION-2
2011年
6月3日(金) – 6月21日(火)
坂本政十賜　田中マサシ
濱浦しゅう　横澤進一

ギャラリートーク［参加費 ¥500 ドリンク付き］
出品作家×藤村里美(東京都写真美術館学芸員)
DIVISION-1 5月21日(土)16:00
DIVISION-2 6月11日(土)16:00

アップフィールドギャラリー
開廊時間 12:00〜19:00(会期中無休)

「フウケイ」展にむけて

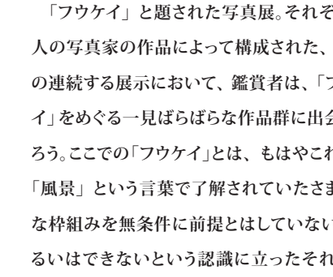
「フウケイ」と題された写真展。それぞれ四人の写真家の作品によって構成された、二つの連続する展示において、鑑賞者は、「フウケイ」をめぐる一見ばらばらな作品群に出会うだろう。ここでの「フウケイ」とは、もはやこれまで「風景」という言葉で了解されていたさまざまな枠組みを無条件に前提とはしていない、あるいはできないという認識に立ったそれぞれの写真家が、カメラ／写真を媒介に外界と向かい合い、それぞれのやり方で立ち上がらせた、何らかの外界の「見え」であり、外界と内面が接する界面に結ばれたイメージのことだ、と、とりあえず定義しておこう。

その「フウケイ」をめぐる写真家たちのとりくみの成果は、二つの会期のそれぞれにおいてある方向性をもって呈示される。その違いはかならずしも明確ではなく、したがって今回の展覧会は、鑑賞者にとって、それぞれの写真家の作品とともに、それらが集合的に提起している問題の在り処を、各々考える機会でもある。ここでは試みに、第一の会期（DIVISION-1）では外界に、第二の会期（DIVISION-2）では内面に、少しずつその重心が寄っているととらえてみたい。

まずは外界よりに重心を置いた DIVISION-1 から、畔柳寿宏と相馬泰による都市写真の呈示するフウケイについて考えてみよう。一定の方法論を採用する彼らの作品は、もともとは外界に対する分析的なまなざしを契機としているように思われる。しかし畔柳の作品は、その分析の報告ではなく、むしろ分析のプロセス自体を空間に上書きしてしまったような奇妙な余剰をはらんだフウケイを出現させる。それは実は、イメージを分割してプリンターによって出力する際の、イメージと用紙のタテヨコ比の関係で生じた余剰部分にすぎないのだが、その余剰をはらんだフウケイに、私たちは時間や記憶や予兆といったものを勝手に読み込み、上書きし始める。対照的に、相馬の提出する抑制の効いたフウケイは、都市写真のある種の類型をあえて踏襲している。中判フィルムのシャープな描写力による、情報量の多い、しかしながら地名やランドマークなど固有名を持った場所へと結びつく手がかりは周到に除外された街角のイメージ。ふつうならそこには「場の無意識」といったものを読み取りたくなるところだが、余剰をはらんだ畔柳のフウケイと併置されるとき、相馬のそれはもはや分析的であるというより、フィクショナルな性質を帯びつつあるように見えてくる。情報のネットワークに覆われた日常を生きる私たちの今日的リアリティに見合うのは、分析の対象というより、そこに過剰な意味を上書きしていくような外界との接し方かもしれないからだ。

外界に軸足を置いて生み出されるフウケイが、かならずしも分析や読解の対象とならないという意味では、山方伸の今回の試みはより徹底している。その場の光に反応すること、という条件のみを自らに課し、撮影された写真群は、場所も時期も対象との距離もさまざまで、被写体自体はきちんと写っているから一見すると身辺雑記風なのだが、たとえばそれらを「日常」といった言葉に回収するのでなく、その表面にとどまって見ることを私たちは求められている。写真家はただひたすら写真を通じて「ほら、それ」と指差すだけである。「それ」として示されている対象（＝被写体）も、示そうとしている主体（＝まなざしの起点としての写真家）もここではあまり問題ではなく、いわば文脈を欠いてなお指示代名詞としての機能する写真のふるまいだけが、イメージの数だけ宙づりにされ、その都度の光への反応として乱反射している。中村綾緒が、カメラ／写真を媒介にとらえる外界もまた、分析や読解の対象といった姿勢とはまったく様相を異にしている。それらはつねに不確かで、生成しあるいは消滅するような変化のただ中にある。夜の公園に集まる人々であったり、あるいは水とたわむれる身体の様相であったりと、中村が外界の不確かなありさまをとらえる際のモティーフはさまざまだが、それらは山方のスナップショットがそうであるように、被写体それ自体は大きな意味を担ってはいない。そうではなく、不確かな世界を「ほら、それ」と指示することのできるカメラ／写真のふるまいに力点が置かれている。ここでのフウケイは、もっぱらそうしたカメラ／写真のふるまいによって成立しているのである。そのようにふるまうカメラ／写真とは、写真家にとってもうひとつの他者＝外界でもある。

Toshihiro Kuroyanagi
畔柳寿宏



相馬 泰 Yasushi Soma

中村綾緒 Ayao Nakamura

Shin Yamagata
山方伸

DIVISION-1

Masatoshi Sakamoto
坂本政十賜

田中マサシ
Masashi Tanaka

濱浦しゅう
Shu Hamaura

Shin-ichi Yokozawa
横澤進一

DIVISION-2

次に DIVISION-2 で展示される作品を考えていこう。ここではフウケイを成り立たせる契機は、より内面のほうに置かれているように見える。

坂本政十賜と田中マサシが呈示するのは、ともに植物をめぐる「フウケイ」だ。坂本の作品では主として孤立した植物、田中の作品では群れとしての植物という違いはあるが、ともに私たちをとりまく日常的な光景のなかに、ふだんはあまり気に留められることもなく存在しているような植物が、ここでのフウケイを成立させるための契機となっている。外界からある要素をとりだし、それに注目する。しかもそれらをイメージとして定着させる仕方は、いずれも写真のもつ描写性をストレートに活用したものだ。とすれば、彼らのフウケイは外界の側に軸足を置き、それを記録し、分析や読解する行為のように見える。しかしそうではない。それらの植物は、何らかの意図をもってそこに植えられているという意味で人為であり、それ自身のサイクルに従って成長しているという意味で自然である。植物は私たちに対して無関心な、絶対的な他者でもあり、同時に生命的な存在として私たちに親和的でもある。ここでは植物それ自体よりも、そうした植物の両義的な存在の仕方が重要なのだ。植物を契機として成立している彼らのフウケイには、外界に関する報告であると同時に、それを見る私たちの内面がひきだされる場でもあるという両義的な様相が現れる。より風通しのよい坂本のフウケイと、より濃密で陰影をはらんだ田中のそれとは、異なる種類の反応を、見るものからひきだすだろう。

濱浦しゅうと横澤進一の呈示するフウケイは、それぞれのイメージがとらえられた「とき」と「場所」とにより強く結びついているように思われる。そしてそのフウケイの成立の仕方は対照的だ。濱浦の場合は、その「とき」、外界と交錯することによって生じた内面からの反応が、その都度、結節点として、閉じられた小宇宙のような濃密な場 = フウケイを成り立たせる。それが成立するには、その「とき」でなければならなかったし、そしてその「とき」でなければならない理由は、おそらく多分に撮り手の内面の側にある。他方、横澤の場合は、その「場所」のみが生じさせる反応として、フウケイが成立している。横澤はいつもある同じ東京郊外の土地をフィールドとしている。そしてその「場所（＝外界）」からの刺戟によって内面の反応が生じ、それに促されるようにして進められる持続的な横澤の歩行の軌跡として、連鎖的なフウケイが産み出されていく。濱浦のそれがその「とき」を契機とする凝縮や凍結のようなものであるとすれば、横澤のそれはその「場所」を契機とする増殖や沸騰のようなものだ。

「フウケイ」と題された写真展にむけての、このみじかい考察において示した枠組みは、あくまで暫定的なものだ。そしてそれぞれの写真家の作品もまた、「フウケイ」にたいするとりくみの現在地の報告であり、それらが一時的に構成する「フウケイ」展のあとに、またそれぞれ新たな方向へとそれぞれのとりくみが進められていくだろう。今回の展覧会は、鑑賞者にとって、それぞれの写真家の作品とともに、それらが集合的に提起している問題の在り処を、各々考える機会でもある。その思考は、展覧会場を出たときに、鑑賞者たちの外界へのまなざしにいかなる変化をもたらすのだろうか。

増田 玲（東京国立近代美術館 主任研究員）